

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」10月号（通巻第29号）
2009年9月28日発行
[発行人] 赤塚祐一郎
[編集人] 大森美知子
[発行所] 株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

10

October Edition
2009, vol.29
Free of charge

この人の声が聴きたい◎10月 ウエイウエイ・ウーさん(二胡・ヴァイオリン奏者) 大陸を吹く風とともに やってきた演奏家

二胡という楽器は、シルクロードを経て中央アジアより中国にもたらされたらしい。モンゴルあたりがその原型の発生地なのかもしれない。この人の出現以来、二胡は珍しい楽器ではなくなったが、間近にこの楽器の生音に接する機会などめったにあるものではない。ラジオの収録を兼ねて、その二胡を目の前で演奏してもよいという知らせを受けたときは、期待で胸が膨らんだ。

その日は太陽がじりじりと照りつける典型的な夏日だった。約束の時間ぎりぎりに彼女はやってきた。背中に小さなゴルフバッグのようなケースを抱えた姿は、張芸謀の映画から抜け出してきた少女のようでもあり、あるいは彼女が今住んでいる武蔵小山の商店街を闊歩している今風の娘さんのようでもあった。(なんだか、矛盾したことを言っている)。

いや、どちらも本当のことなのだ。ドアを開けて彼女が入ってきたときは、蒸し暑い夏の日にもかかわらず一陣の風が吹き込んできたような爽やかな印象を受けた。そして二言三言ことばを交わして、この人とはどこか生活の色濃い場面の中でお会いしたことがあるという既視感にとらわれた。遠い異邦の見知らぬ女性の風貌と、身近なところと一緒に時間を過ごしてきたような親密な風貌という矛盾した要素を併せ持つ女性こそ、ウエイウエイ・ウーさんなのである。

「お父様は厳しかったそうですね。遊び盛りの思春期に毎日練習というのは辛かったですよね」

「どうして、私だけが皆と遊べないかと泣いていました。だから、ヴァイオリンには涙の跡がたくさんついていました」

父親が作曲家。妹も歌手(名古屋万博で松任谷由美と歌ったアミンは彼女の妹である)という音楽一家で、幼い時から英才教育を受けた。彼女が本格的な二胡演奏に転じたのは十五歳の時。メンデルスゾーンのバイオリン協奏曲第二楽章を聴き、これは二胡で弾いたらどうだろうかと閃いた。来日後は、サントリウーロン茶のテレビCMやNHK「ダーウィンが来た!生きもの新伝説」のエンディングテーマ演奏、NHK交響楽団やケニー・Gとの競演など活躍の場を広げている。

さて、ラジオの中で話を始めてまもなく、彼女は演奏の準備に入った。準備と言っても、ことさらなチューニングもなければ、練習もなく、すぐに音出しの姿勢になる。この構えが美しい。瞳を閉じ、薄暗いスタジオの靈氣を揺らすようにその身体を揺らすと、震えるような見事な音が響き始めた。演奏してもらったのは、一九七一年、パブロ・カザルスが九十四歳の時に、ニューヨークの国連本部で演奏し、平和を願う世界の人々の胸を衝いた『鳥の唄』である。二胡版の『鳥の唄』を聴きながら、私はカザルスの故郷カタロニアの風景や、中央平原を吹く風、国連本部を飛ぶ鳩などの映像が過ぎるのを感じた。目を開けると風の中で身体を揺らしながら演奏する荘厳な女性がそこにいた。

(ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美)



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、

声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粹と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ、田中宇氏の国際ニュース解説「世界はこう読め! I・II」、斬家・瀧川鯉昇匠師の癒し系連続トーク「鯉昇の屋敷まくら」、加藤和彦さんやムッシュかまやつさんなど、ミュージシャンにお話を伺う「Music Talk」、ラジオ番組「ラジオの街で逢いましょ」の番外編「ラジオ街プラス1」が好評。さらに、慶應MCC開催の『夕学』のなかから、各界の第一線で活躍する文化人による講演を厳選してお届けしています。インド哲学の碩学・中村元先生の講演も配信開始しました。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優馬丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源を自家業龍中に現代に演じざる作家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る作家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの斬家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきます。毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスモビー寄席

「日時」10月23日(金)午後7時開演(午後6時半開場)

「場所」牛込筆筒区民ホール(大江戸線・牛込神楽坂)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていき、自家薬籠中に演じきる現代の斬家たち！ そんな斬家の先端を行くのがこの人・立川談笑。エッジの立った至福の話芸、たっぷりお楽しみください。

立川談笑

(たてかわ たんしょう)

落語立川流。平成十七年真打昇進。東北弁の「金明竹」や現代風にパージョンアップされた「片棒・改」「シャブ浜」など、古典落語をあらゆる方向から解体し、時代や社会ネタを織り込んで再構築した型破りの落語を次々と放つ鬼才。おなじみの斬もただでは済まされぬ悶絶爆笑ネタに。テレビの司会やレポーターとしても活躍中。



ロケット団

(ろけとだん)

平成十二年、劇団員から漫才師に転身。世間一般の流行に迎合せず、寄席を中心に活躍中。時事ネタを盛り込ませるスタイルで人気を博し、近年成長著しい若手漫才界のホープ。定例会やライブなど精力的にその世界を展開している。平成十八年に花形演芸大賞銀賞、平成十八年度文化庁芸術祭新人賞など多数受賞。



明烏い話

連載第30回

本田久作



斬家は季節感を大事にすると言われるが、それは彼らが暑くなるときちんと絹の着物に着替えたり、冬場に胡瓜を食べるたびに講釈を垂れるからではない。

「天神山」は東京では「安兵衛狐」という題で知られた斬で、もともとのサゲは狐の鳴き声のコンと「来ん」という言葉を掛けた地口オチだった。枝雀はこれに手を加え、人と夫婦になった牝狐が最後に正体が現れ、子を置いてもいた森へと帰っていくさまを語り、「その時に書き残しました歌一首、『恋しくばたずねきてみよ南なる天神山の森の奥まで』。これは葛の葉伝説にもとづく斬で、元ネタではこの歌は「恋しくばたずねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」となっている。枝雀が敢えて原作の歌を一部改作したのは、その方が私のような阿呆の客にも歌の真意が伝わるからだと思うのだが、そうではない。枝雀の作ったオチの胆は「ある春の日のお話でございます」にある。この話のある日が秋の日では形にならないし、夏の日の冬の日に至っては論外である。ところが葛の葉の季語は秋なのだ。枝雀は葛の葉という言葉

抜き取るためにわざわざ元の歌を改作したのだろう。そうすれば、「天神山」のラストが春になる。牝狐が人との間に生んだ我が子を捨てて森へ帰っていく季節は秋ではなく、春でなくてはならない。

同じ春の斬の「花見の仇討ち」を遊雀が春先の高座にかけたことがあった。それまでの数日いかにも春めいた暖かい日が続いていたというのに、その日に限って季節外れの雪が降り、春の斬をするにはもつともふさわしくない天気となった。遊雀は「寒いですな。こう寒いと待ち遠しいのは春です」と言っ

てネタに入った。その「花見の仇討ち」よりももつとポピュラーな春の斬が「長屋の花見」である。これは季節ものの最たるネタだから、春になると寄席ではほとんど毎日のように高座にかかる。五代目小さんは「長屋の花見」が大好きだったのだが、身分が身分なので寄席では深い出番にしか上がることができず、そのためいつも自分より先に高座に上がる斬家にこのネタをやらせてしまう。そういうことが何年か続き、怒り心頭に発した小さんは、とうとう正月の初席のトリで「長屋の花見」をやったというが、これは小さんが正しい。正月は初春だから、これほど春の斬をするのにふさわしい席はないのである。

同じ季節ものでも秋の斬の「目黒のサンマ」をやる時は、皆が皆必ずと言っていいほど枕を「桜鯛」という小咄をふる。家来が殿様に庭に咲いた桜を見るよう促し、その間に食べさしの鯛をひっくり返す、あの斬だ。昨年だったか、ラジオデイズの落語会で市馬が「目黒のサンマ」をやる前にやはり枕でこの小咄をふった。殿様が鯛の代わりをと言うが、代わりに用意していない。市馬が演じる家来

は進退極まり殿様に言う。「殿様、お庭を御覧下さいませ。見事な紅葉でございます」

毎年秋になると私は食べる秋刀魚よりも先に「目黒のサンマ」に食傷するが、それほど聞き飽きた私の耳にも市馬の「目黒のサンマ」はことのほか美味であった。同じ刺身でもツマが変われば味が変わる。斬家にとって季節とはそういうものだ。そろそろ「目黒のサンマ」の季節である。

●ほんた、まうさく

一九六〇年大阪府生、落語作家。二〇〇二年の「仏の遊」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主左受賞作「手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「徳の葬式」(按摩の夢)、「幽霊髪」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讀大ばなし 貳拾九

三遊亭圓窓

き 『水神』

劇作家の菊田一夫氏の唯一の創作斬であり、六代目・圓生が素斬として口演した。あたしは平成二十一年にピアノとのコラボとして、NHKBS2で初演した。ベートーヴェン、モーツァルト、グリーグなどの名曲を挿入曲とした。

式 『みんな違って』

金子みすゞさんの詩「私と小鳥と鈴と」を核にして、あたしが創作したもの。みすゞさんは二十六歳の若さで自殺をした悲劇の詩人。とはいえ、その作品には愚痴や恨みはなにか一つ残していない。明るく、人に元気を与える素晴らしい詩ばかり。これもピアノとのコラボで口演している。

参 『猫定』

コラボは古典落語より創作斬のほうが演りやすい。古典は素斬としての既成概念が強く邪魔をして演りにくい。そこで、ひねくれ者のあたしはこの古典落語をピアノとのコラボに選んだ。元々、講釈から移入した落語なので場面転換は多いし、その転換時間の割愛も長く多くなる。猫と人との情の交流がテーマなので、演りやすいかもしれない。

行こみちが 行けばちが

女流二ツ目の修行日乗②



柳亭こみち

「燕路は前座の頃、俺の書いた葉書を泥だらけにしちやった」。大師匠が笑いながら話してくれた。宛先は某有名歌手。真面目な前座だったうちの師匠。雨のなか葉書を抱きしめポストへ急ぐ。人間、「大事な物」と意識するほど、手が滑ることもある。葉書は風にさらわれ雨に濡れ、トラックに轢かれたという。

「俺は、この失敗はこいつの何かを表している」と思っ、しばらくその葉書を乗にして使った」。私は他人事のように話を聞いていた。

修業中、師匠宅の食器をいくつも割ってしまった私でも特別に注意するのは、師匠の長男が陶芸教室で焼いた食器。どんなに慌てても彼の作品だけは丁寧に扱う（他を割っていいわけではないが）。毎日お茶を飲む師匠のために焼かれた急須。焦げ茶色の渋く美しい力作だ。その蓋が、ある日私の手から滑り落ちた。あの時ほどタイムマシーンに乗りたかったことではない。粉々だった。

私は破片を拾い集め、4時間かけてセメダインでつけ合わせた。丸みを少し失うも胡麻粒ほどの破片も復元した。

頭を床に擦り付けて謝る私を誰も怒らなかつた。作者も「大丈夫だよ」と。急須には別の蓋があてがわれ、割れた蓋は用無しに。でもその蓋は以後何年間も、茶筍筒の一番目立つ所に置かれた。その前を通るたび胸

を締め付けられる思いがした。そして泥だらけの葉書の話の思い出した。

※大師匠：師匠の師匠のこと（ここでは柳家小三治）

●りょうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は長門。特技は日本舞踊、言葉流名取（言葉香美）。落語協会野球部チーMR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第29回

貸し借り

松井高志



落語・講談に描かれる悲喜劇に使われる要素のうち、パンチの効いたものといえは金銭の貸し借りであろう。ま、昔と今では借金のあり方も随分違うのであるが、あこぎな金貸しは昔からいるし、そこからよんどころなく借りたために首が回らず、そのために事件が起きる、というのもしいわば、古今不変のお定まりのパターンで、ただ昔の場合はきつかけがサイコロを使ったバクチなどであつたりするだけのことだ。

借り方に理なし

というのは、貸し借りに関する基本法則をいう諺。力士ものの講談「梅ヶ枝仙之助」などに出てくる。意味は、貸し借りが原因でトラブルが生じた場合、借りのある者は、貸した者に対してどうしても理屈の上で不利であ

る（だからできうべくくんば借金はせぬ方がいい）ということ。

もつとポピュラーなものでは、

百両（または千貫）のかたに編笠一蓋

というのがよく引用される。百両の大金を貸しても、担保は編笠一つ、といった合わない取引のことだが、たとえば落語「井戸の茶碗」で、浪人が生活に困って売り払った仏像の体内から出た大金と引き替えに、手近の古びた茶碗を代物として仏像の買い手へ渡すが、こういう時に引用される。ところがその茶碗が名器「井戸の茶碗」。編笠どころではなかつたわけだ。

もつと現代の我々にも分かりやすい比喩表現がこれ。

借りる時のえびす顔（地蔵顔）、返す時の閻魔顔

金を借りるときはニコニコ顔だが、返す時は不機嫌なものである。できれば踏み倒したい、というのがホンネ、の意。講談「笹野名槍伝」（大島伯鶴口演）では、「五常の道（仁・義・礼・智・信）はたしかに大切だが、あまりに度を過ぎれば身を滅ぼす」という。なかでも、「信に過ぎれば損失がある」の具体例として、なまじマジメで信用のありすぎる人は、連帯保証人などを頼まれたあげく酷い目に遭う。そこにこの言い回しが出てくる。親切過ぎるのも考えものだ、というのである（筆者ではない、伯鶴先生がそー言ってるのだ）。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く！ 話芸のきまり文句」(平凡社新書)、「テンドク」(難読漢字自習帳)、「パズリ」(「江戸」に学ぶビジネスの極意)「アスペクト」など。「話芸のきまり文句」サイトは<http://magidation.com/ogin-ryu.com/>

microSD版
ラジオデイズギャラリー

「語り」を持ち歩こう!
いま旬の噺家の息づかいもリアルな必聴落語の数々、現代がよくわかるエッジの立った国際時事解説がこんな小さなカードにみっちり満載です。

<p>●落語永久保存30選 合計収録時間:約20時間09分 ¥9,900.-</p>	<p>●爆笑演芸会33選 合計収録時間:約18時間24分 ¥9,900.-</p>
<p>●特選現代落語35選 合計収録時間:約14時間11分 ¥8,800.-</p>	<p>●田中宇の「世界はこう読め!」 合計収録時間:約11時間27分 ¥3,900.-</p>

新発売

たとえば...

ラジオデイズギャラリー入り microSDカード

microSDカードが使える携帯音楽プレーヤーでお手軽に楽しめます。パソコンで聴くには、カードリーダーをご使用ください。※携帯電話では再生できません。

お問い合わせ：(株)ラジオカフェ
<http://www.radiodays.jp/>
メール: info@radiodays.jp Tel.03-3341-1230

第30回オリンパスモビー寄席

柳家喜多八独演会

【会場】お江戸日本橋亭「本戸」2800円（前売2500円）
【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●11月17日（火）

柳家喜多八・「ゲスト」春風亭一之輔

※予約申込受付中。ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話（011-3334-1130）より、先着順です。

第31回オリンパスモビー寄席

三遊亭白鳥独演会

【会場】お江戸日本橋亭「本戸」2800円（前売2500円）
【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●12月15日（火）

三遊亭白鳥・「ゲスト」二遊亭ぬう生

※予約申込受付中。ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話（011-3334-1130）より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストーリーリング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信しています。どうぞ真夜中の語りいを耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>
インターFM毎週日曜日の深夜23時から23時半まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

9月27日 立松和平（小説家）

10月4日 山上路夫（作詞家）

11日 福岡伸一（生物学者）

18日 小堺正記（NHKプロデューサー）

25日 町山智浩（映画評論家）

長月の落語会

めつきり秋めいてきた第二八回オリンパスモビー寄席（九月一日）は、桃月庵白酒独演会。お江戸日本橋亭は満員の盛況ですが、今日のお客は手強そう。開口一番は入船亭扇辰師匠の弟子で辰じんさん。ネタは「手紙無筆」。端正な芸は師匠譲りで先が楽しみです。さて早速真打登場！ 白酒師匠がニコニコおにぎり顔で高座へ。選挙の話など顔に似合わない辛口なマクラをふつて「替り目」に入ります。酔っぱらいの亭主がいい加減な歌を歌いながら歩いていると車屋さんに出くわします。お馴染みの古典も凄く新鮮に感じる一席であります。続いて登場は三遊亭天どんさん。円丈師匠の弟子で最近実力をあげているとか、そんなことはおくびにも出さずユルユルバカバカしい新作「手足」を演じます。診察室に入ってきた男、ほとんど普通だけどどこか一つおかしいために、すべてが可笑しくなっていく。漸く笑いをとりました。面白くないと自問する天どんさん、安心なさい、貴君の存在自体が既に面白いのですよ。仲入り後、トリ

はモチリン白酒師匠、御存じ「付き馬」で勝負です。世間には騙す人と騙される人がいる。金もないのに吉原で遊んだ男、店の若い衆が付き馬でついてくる。何のかんと言いつたのが桶屋……。可哀そうな若い衆の運命や如何に？ 毒気のある言葉を振りまきながらも客に嫌味を感じさせず大いに笑わせる話芸は、文句なし若手ナンバーワン！ 古典にも白酒流のオリジナリテイが出て秀逸、お奨めの噺家ですよ。いやホンマ、落語って本当におもしろいですねえ。（ラジオデイズ寺和尚）



「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

今最もブックイング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

●戦後落語論

新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。

三遊亭円丈

本田久作

●戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。

高橋源一郎

小池昌代

●戦後マンガ家論

脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一言あるこのふたりが存分に語り合う。

養老孟司

内田樹

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいあります。ラジオデイズサイトによるこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

「オリンパスモビー寄席」携帯用特別コンテンツ

モビー寄席特別コンテンツでは、モビー寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



p@mobee.jp

バーコードで簡単アクセス!

左のQRコードを携帯のカメラで読み取り、メールを立ち上げて撮影写真を添付し送信。
※ドメイン指定受信の設定をされている方は、mobee.jpを追加してください。

月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、見開きページの落語家さんのプロフィール写真を撮影、メールに添付して送信すると、アクセス先URLが記載されたメールが返信されてきます。



Mobee (モビー) とは?

オリンパス(株)とホスティング・アンド・セキュリティ・インクスの共同開発による、携帯サイト作成ツールと先進の画像認識技術によるサイトアクセス方法を月あたり263円~という低価格でご利用いただける携帯サイト作成サービスです。

個人の方から法人のお客様まで自分専用の携帯サイトを簡単に開設することができます。用途に応じて、クーポン作成やメルマガ配信などのプランもご用意しました。お申し込みは、PCから<http://pdh.mobee.jp>にアクセス!

ラジオデイズの窓から

大きな窓から見える四角い空が青く澄み渡っています。十月は一年のなかでもいちばん季節の少ない月だそうですが、自然に溶け込んで過ごすには最適期ではないでしょうか。

おかげさまでラジオデイズも二周年を迎え、録り下ろしの落語のほか、今年生誕百年の太宰治作品の朗読、仏教哲学の世界的権威・中村元氏の名講演など、コンテンツもますます充実中です。ポケットに声と語りを……。